

## 審査講評

### 【総評】

今回の提案競技は非常に高いレベルでの争いとなりました。また鹿児島市では初の取り組みとして第二次審査の提案説明と質疑応答が一般公開され、多くの市民や関係者が参加し注目するところとなりました。厳正な審査の結果、以下の二者を最優秀者、次点として決定しましたが、第二次審査の対象者には、いずれも素晴らしい提案および説明を行っていただき、本事業に対する市民の関心を高めるうえで大きな貢献を頂きました。残念ながら第一次審査にて選外となった提案者の皆様も含め、本提案競技にご参加いただいた皆様には厚く御礼申し上げます。

今回は、持続可能な未来の実現に向けた子ども達へのメッセージを提案に込めて頂くことをお願いしました。地域の皆さんや子ども達と手を取り合い、これまでにない新しい学校を作っていこうとする若い提案者の皆さんの熱意には、とくに光るものがありました。また県内外から幅広く提案を募りましたが、二次審査対象者には、いずれも県外・県内の協働によって学校づくりに取り組む体制で提案を頂きました。八校の廃校利用を含む地域づくり、あるいは地球環境に配慮した構造木質化といった課題にも挑戦して頂きました。こうした多角的な課題に対して真摯に取り組んで頂いた結果、冒頭にのべた素晴らしい成果につながったものと思います。

今回の提案競技は、義務教育学校の実現に向けた第一歩になるとともに、鹿児島地域の建築や地域づくりにとっても、実りの多いものになったと思います。今回の提案競技そのものが「学び」として今後を活かされ、地域の発展につながることを期待致します。

### 【最優秀案 設計候補者】

一級建築士事務所大西麻貴+百田有希/o+h

本提案は「桜島地域における義務教育学校基本構想」に示された、学校が目指す地域での役割、すなわち「①地域に開かれ、地域の核となる学校」「②地域の歴史や文化を受け継ぎ、新たに創造していく学校」というあるべき姿を最も深く理解し、その実現に向けた課題を真正面から捉え、魅力的な解決策に結び付けようとする点で、本企画提案競技の最優秀者にふさわしいものと、全委員の総意をもって決定しました。

本提案は「桜島まるごと学校」というタイトルのとおり、まず桜島全体に展開する学びを想定し、学校は、こうした子ども達の活動の起点となる「ホームとしての学校」と位置付けています。他の二次審査対象案が一概に「集まる」「たまる」「溶け込む」などといったキーワードで学校にセンター的な複合機能を持たせ、それを地域開放する、というコンセプトで臨んでいるのとは逆のアプローチです。この点において本提

案は唯一無二のものです。施設整備を超え、地域と一体となった「学び」の形成を確固たる目標に据えた点で秀逸な提案です。

こうした強いコンセプトに基づく取り組みは「学びの場づくり」チームと「学び方づくり」チームの共同体制によって追求されます。今後は、これらのチームと桜島の皆さん、教育・建築に関わる教員や行政担当者が一体となり、桜島にしかない「義務教育学校」を造り上げていく必要があります。「学びの場づくり」「学び方づくり」の双方において様々な課題を克服する必要がありますが、大きな目標を真正面に据え、現地に駐在し、鹿児島を拠点とするメンバーと一丸となって取り組もうとする体制には、その重責を担うための強い決意と実行力を期待できます。

学校の建築は八棟の建物が集落のように集まる平面・配置計画を特徴としています。分棟型の計画にはメリット・デメリット双方が考えられますが、景観やアプローチなど周辺環境との馴染み、木造本来の良さを活かした暖かみのある空間、改変に対する追従性、そして学校生活のあらゆる場面に溢れる桜島への眺望などに、デメリットを補うメリットがあるとの説明でした。本案以外の二次審査対象案はいずれも「一体型」で、ややもすると閉鎖性や自己完結性を帯びてしまうことが懸念されましたが、本提案はこれらと対照的でした。もちろん分棟型の採用に伴う様々な課題については、協議を深め適切な対応をとる必要があります。また「郷中教育の文化を引き継ぐ」として提案された学年や教室タイプを超えた教室棟のユニット構成についても、実現に向けて多くの課題が想定されます。しかし本事業では、こうした課題を解決する労力を厭うのではなく、ここで提案された「桜島まるごと学校」によって得られる成果を追求するほうが、桜島の将来、子ども達の未来にとってより積極的な意義がある、との結論に至りました。

公開プレゼンテーションの後、テレビ報道で、来場した小学生の方が「桜島が見えて、桜島の特色が詰まっているいい学校になってほしい」と語ってくれたのを見ました。この素直な期待に、まさしく素直に答えているのが本提案だと思います。

## 【次点】

### 日総建・みのだ共同企業体

熟慮に熟慮を重ねた力作です。そして地元設計事務所と大手組織設計事務所が JV 比率 50 : 50 の協働で取り組むという業務実施体制には高い信頼性が認められました。

敷地の高低を活かし、高さを抑えた平家建の校舎は景観に違和感なく馴染み、外部から直接アプローチできるランチルームや他目的ホールなど、周辺環境とのつながりも良好です。三つのレイヤーからなる平面構成は自由度が高く、中央の特別教室エリアには「短冊庭」を設け、明るく開放的な空間としつつも、子ども達が自分の居場所を確保できるように配慮されています。普通教室エリアには教室群が緩やかに円弧を描き配置されています。

本案は唯一の平家建での提案で、独自性が高い挑戦的な提案である反面、建ぺい率の点で国立公園法の規制への対応が必要となる可能性や、コスト面、クラスの再編成や増減への追従性といった点に懸念が示されました。これらに対しては特別教室エリアの積層化、普通教室の一部ラーメン構造化などの対応方針が示されました。また、他の二次審査対象案が構造木造化について積極的な提案を行っているのに対し、本提案では木質構造の採用が一部に留まっていることの理由として、自由な内部空間を確保するうえで制約となるため採用しなかったとの回答がありました。

本提案では明るく魅力的な内部空間が提示されました。その点で「一体型」の提案のなかでは最も意欲的であるとの評価を得ました。しかしながら「一体型」案の宿命として、やや自己完結的になってしまう懸念は否めませんでした。とくに本案では、木質構造の採用を見送って追求された「自由な空間」が抽象的でピュアな美しさを持つがゆえに、残された廃校を含む地域のありのままの風景からはやや遊離した印象になってしまうことが懸念されます。その空間の質が研ぎ澄まされたものになればなるほど、例えば廃校利用などでその雰囲気と合わせていくのは難しいと思われます。言葉を換えれば、皆がときめくような「新しい学校」の誕生は大いに期待できますが、一方で学校が無くなったあとの集落との対比が際立ってしまうのではないかと、思われるのです。集落の情景にも馴染み、寄り添うような印象。「新しい」けれども「懐かしい」ようでもある感覚を、桜島の義務教育学校に感じることができれば本当に素晴らしいと思いますが、こうした感覚を、例えば廃校のメモリアルを移設することだけで醸し出すのは難しいように思われます。こうした点から最優秀案を超える評価を得るには至りませんでした。

## 【二次審査対象案】

### 梓設計・ixrea 共同企業体

大変バランスの良い堅実な提案であり、全応募作品を評価するうえでの標準となる提案でした。県内設計事務所と県外大手設計事務所の JV 比率は 45 : 55 とバランス良く、30代の主任技術者と協力技術者の熱意を管理技術者が的確に受け止めながら事業を進めようとしている姿勢が、プレゼンテーションの様子から良く伝わってきました。

建築的な提案としては、敷地の造成を最低限に抑えるために運動場のレベルの建設予定地に建物をコンパクトに集約し、延床面積をやや抑えめにして確実なコスト管理を図るという提案でした。棟構成については、分棟、別棟扱いなどの検討も視野に入れつつ現段階では「一体型」とし、構造要素を兼ねた鉄筋コンクリート (RC) の壁等で区画することによって構造木造化を実現する提案でした。RC 部分はトイレ等になっていて、フレキシブルに転換可能なクラスルームユニットを分節する仕切りの役割も果たしています。

このように大変合理的で効率的な提案となっていますが、審査の過程で議論の焦点

になったのは「ひとつペプラザ」などの地域開放部門がやや奥まっけていて、開放的な雰囲気欠けること、この点を含め施設全体がやや自己完結的に感じられたことです。一般的な学校施設としては十分に満足できる提案内容なのですが、「①地域に開かれ、地域の核となる学校」「②地域の歴史や文化を受け継ぎ、新たに創造していく学校」という、本校がとくに目指さねばならない地域での役割を考えた場合、最優秀案、次点案を超える評価には至りませんでした。

### 東畑・三島設計共同企業体

完成度が高い力が入った提案です。大きな「ひとつ屋根」の下に多世代の人々が目的を持って集まる場所づくりを行い「ひとつの桜島」の魅力が新たな建築から発信される、という提案です。屋内プールを一段下がった駐車場レベルに配置し、大屋根としつつも高さ制限をクリアできるようにしています。平面構成はシンプルで、吹き抜けのある中央部分に開放的なラーニングスペース等を配置しています。大規模な木造建築を実現するため「木材調達検討会」を設け「木材コーディネーター」を参画させることなど、実績に基づく周到な事業実施計画も高く評価されました。

しかしながら「ひとつ屋根」というキーワードに象徴されるように、本提案の施設にはセンターとしての印象が強く、自己完結的になりがちな「一体型」案の難点を補うには根本的な変更が必要であろうと思われました。教室を含む学習空間については、シンプルな構成である反面やや単調にも思われ、例えば生徒が思い思いの居場所を自然に獲得できるような工夫が必要だと思われました。シンプルで明快である分、配置や外観もやや固定的で、将来の変化に柔軟に対応できるかどうか懸念が残りました。以上のことから、最優秀案、次点案を超える評価には至りませんでした。

令和4年8月31日

桜島地域における義務教育学校基本・実施設計プロポーザル審査委員会  
委員長・木方十根